

# カトリック 仙台教区報

2005年11月6日 No.166

発行  
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

## 「わたしたちはイエスを拝みに来たのです」 「WYD教皇ミサ」の説教より

盛岡地区担当司祭 木村 国基

第20回の「WYD(ワールド・ユース・デイ)世界青年大会」がこの夏ドイツのケルンで開催されました。仙台教区からは青年が15名、アシスタントとして舟山亨助祭、Sr.長谷川昌子(女子パウロ会)と、私が参加いたしました。

日本全体の巡礼団としては300名が岡田大司教を団長として様々なプログラムに参加し、世界各国から集まった約100万人の青年たちと共に「教皇ミサ」に参加してまいりました。

「わたしたちはイエスを拝みに来たのです」という大会テーマのもと、青年たちがケルンで何を感じ、何を受け止めたのか、イエスとの出会いが何を変えたのか、青年たちの文章から感じていただければと思います。ここでは「WYD閉会ミサ」の教皇ベネディクト16世の説教から、青年たちに向けられたメッセージを分かち合ってみたいと思います。



説教をする教皇ベネディクト16世

「このようなあかしこそ、世がイエス・キリストの弟子に期待している、あかしです。そして、何よりもまず、皆様の愛が示すものによって、世は、わたしたち信者が従う星を見いだすことができます(同)。信者がキリストに従い、導かれて歩む時、その姿は世にあつて「しるし」になると教皇は教えておられます。信者が社会にあつてキリストを指し示す「しるし」となっているのか、「私の生き方」は「キリストの弟子」としての生き方にな

る時、「みことば」を通して、「ご聖体に現存」されるキリストに出会う時、私たちは常に「キリストの再発見」の機会に恵まれているのです。この招きに気付き、受け止め、キリストという星に導かれて生きて行きたいものです。そして何気ない日常生活での私たちの「思い・ことば・行い」が社会にあつてキリストを示す「しるし」となりますように。

大切な事柄です。参加した青年たちは様々なプログラムを通して、仲間たちとの祈りと信仰の分かち合いの中で、自分を導いて下さっているキリストとの出会いを体験しました。「神様が共に歩んで下さっている(インマヌエル)マタイ1・23参照」という信仰体験は人生のありようを大きく変えていきます。「キリストを再発見」し

っているのか。「キリストの再発見」は私たち一人ひとりにとって、人生のありようを振り返る大切なチャンスです。この再発見はケルン大会に参加した青年たちだけのものではありません。ドイツでなければ神様に出会えないということでもありません。日々の出来事を通して語りかけておられる神様の導きに答えて生きて行こうとす

紹介いたします。「今まで、神様が居る、というのは頭では分かっていたつもりだったんですけど。本当に神さまが居る!と今回、心で実感できました。なんかあ、これからは安心して生きて行ける気がします!」



WYDシンボルマーク

### WYDに参加して！ 感動・涙・友情・愛



ケルン大聖堂



ケルン大聖堂ミサ奉納



イエス様の愛に触れた  
鶴田真一(八木山教会)  
まず、この度のWYD  
に参加できたこと、これ  
はまさに神様の恵みです。  
それは多くの人々との交  
流を通して、イエス様の  
愛に触れたこと。日々の  
祈り、ミサ、カテケージ  
ス、分かち合い、ゆるし  
の秘跡によって新たな自  
分に生まれ変わり、ロー  
マ教皇のミサにおいて、  
福音を信じる心と、どん  
な苦しい時にも、イエス  
様の愛を待ち続ける強い  
力を得たように思います。  
同時に教区の皆様方の支  
援を頂き、参加すること  
ができたことは、WYD  
に参加したもののだけでな  
く、日本にいる多くの信  
者の方々にも大きな恵み

があるように思います。心から  
感謝いたします。  
WYDには世界中から多く  
の人々が参加しました。その中  
には、体の不自由な人、経済的  
に恵まれない人もいます。皆、  
イエス様に会うという、心を一  
つにして集まりました。この思  
い、即ちイエス様の愛をもって  
生きることに。これは、今現代に  
おいて求められている心であ  
るように思います。世界は、戦  
争、自然災害、人種差別など、  
非常に緊迫した状態であり、一  
人ひとりが愛をもって生きる  
ことを必要としています。です  
から、この愛をもって、悪に打  
ち勝つということ、私たち一人  
ひとりがキリスト信者として、  
自分のためではなく、人々を天  
国へ導いていく自覚をもって  
生きて行くべきだと考えます。  
私は、WYDに参加して、自

分の進むべき道、どのように生  
きていくべきかを見出し、喜  
びに満たされています。まだW  
YDに参加した事のない方々  
に、ぜひお勧めします。WYD  
に参加して、新たな自分に生ま  
れ変わってください。神様の僕  
（しもべ）として、自分がなすべ  
きことに気付くはずですよ。  
衝撃  
安富 良輔(八木山教会)  
私にとってWYDは衝撃の  
連続でした。日本を出発したの  
は8月15日。11時間の飛行機  
の旅を終えると突然、非日常的  
な空間に放り込まれました。言  
葉、食べ物、周囲の景色がまっ  
たく違う場所です。インドア派  
の私にとって、もうそれだけで  
十分な衝撃でした。しかし衝撃  
はそれだけでは終わってくれ  
るはずありませんでした。各  
国の人柄の違い、大会側の不手

際によるさまざまなトラブル  
etc。  
しかし、苦勞の多い生活の中  
でも大変すばらしい衝撃にも  
出会えました。それは、ケルン  
に集まった全ての人が同じ目  
的、つまりイエスを拜みに集ま  
っているという事実です。WY  
Dのメインイベントである教  
皇ミサは、だだっ広い野原で行  
われました。その広い土地に、  
世界中から人という人が集ま  
り、この野原を埋めつくすので  
す。そしてその人たちの心がみ  
な同じところへ向かっている  
のです。この衝撃はとても言葉  
に表せません。  
最後に、WYDに参加して、  
今、私が切に願っていることは  
この衝撃をより多くの人に感  
じてもらいたい。言葉ではなく  
肌で実感してもらいたいとい  
うことです。

### 塩と光

パウロは、教会は「キ  
リストの体」であると、  
教えてくれます(エフ  
エソ1・22 23参照)。  
ですから、同じ信仰の

命に生かされているわたしたち  
は、お互いの奉仕によって結ばれ  
一つの体を造り上げるのです。ま  
た、この共同体としての教会がど  
のように成長していくのかも、説  
明してくれそうです。「愛に根ざして  
真理を語り、あらゆる面で、頭で  
あるキリストに向かつて成長し  
ていきます。キリストにより、体  
全体は、あらゆる節々が補い合う  
ことによってしっかりと組み合  
わされて、おのおのの部分は分に  
応じて働いて、体を成長させ、自  
ら愛によって造り上げられてい  
くのです」(エフエソ4・15  
16)。小教区の制度は、設立で  
きますし、聖堂の建物も建設でき  
ますが、「キリストの体」である  
共同体は、お互いの関わりによっ  
て、共に育てていくのです。また、  
ミサこそは、教会を育て強めてい  
く最も大切な原動力です。ですか  
ら、できるだけ全員がミサに参加  
し、すべての教会活動が始まるの  
です。お互いが助け合い、奉仕  
し合う具体的な関わりは、共に祈  
り、みこころを分かち合う場にも  
及びます。(博)

WYDに参加して！ 出会い・空腹・分かち合い...



感動と興奮

井口 輝(大河原教会)

今年の大会は、「私たちはイエスを拝みに来たのです」という東方の三博士の言葉がテーマとして使われました。この三博士のように、私たち日本巡礼団は東の日本から西のドイツのケルンの教皇ミサに参加するために行ったのです。

教皇ミサの日はとても印象的でした。前日の教皇様の晩の祈りも興奮と満足感が溢れまじったような感覚を受けましたが、ミサはそれ以上でした。わたしにはドイツ語がわかりませんが、教皇様のいるドームも、とても小さくしか見えません。それでも一緒に場所について祈り、歌うことができる、それだけで感動と興奮が抑

えられませんでしたが、言葉も肌の色も違う、今まで会ったことのない人々の中にいながら、私は会場にいる人すべてが友人のように感じました。

このような貴重な体験をさせてくださった皆様のお祈りと、ご助力にとても感謝しております。そして、この体験を通して知り合った人々とのつながりによって教会が発展していくことを祈ります。

私たちはイエス様に属している

野田 智(八木山教会)

今回 私たちはイエスを拝みにきたのです」というテーマのもとに、世界中から100万人がドイツに集まりました。100万人が一カ所に集まることは大変な事で、とにかく何をすることも苦労が多かったです。しかしそれでも私たちは毎日満たされていきました。

食料が足りないときは近くの人とパンを半分に分けあったり、電車で隣になった人と片言の英語で話したりしました。そのとき私たちは日本人、この人は何人というよりも私たちはイエス様に属しているものという感覚がありました。国や文化、言語が違っても私たちが、何事もなく過ごせたのはまさに奇跡だと思えました。イエス様を中心に集まるとき平和が訪れるということをWYDで身をもって体験しました。今みんな教会の活動をしたいとそれぞれ燃えています。それを勢いだけでするのはなく、イエス様の声に耳を傾け、イエス様を中心にした青年活動をしたと思っています。

「出会い」

渡辺 顕一郎(八木山教会)  
WYDの旅を全体的に総括す

る前に、大会期間中、過酷だったことを振り返ってみたいと思つた。なにより、私にとって過酷だったのが、「食」の問題であった。期間中、出される食事は、パンと缶詰がほとんどだった。最初の方はこの食事でも新鮮味があり、美味しく食べることができたのだが、く日もくる日も同じメニューばかり出されていたので、大会終盤近くになると、もうパンを食べること、見ることもさへ嫌気がさしてき、パンが喉をとらなくなるほどだった。帰国してからも、しばらくの間パン恐怖症に陥つてしまい、なかなかパンを口にすることができなかつた...

感謝しつつ、これからの青年活動に携わって生きたいと思えます。  
星の導き  
川中 翔太(官理教会)

話は変わり、私がWYD大会で得たものは「出会い」であった。大会中、世界各国、日本全国からきた多くの青年たちと交流を深める場が数多く設けられていた。言葉が通じないながらも一緒に食事をしたり、スポーツをしたりして楽しんだことは、私にとって一生忘れることが出来ない出来事だと思つた。その他にも分かち合い、グループ活動を通して多くの青年たちと交わることができた。

私は教会の神父様に誘われて、深い理由もなく参加しました。しかし、参加して全国のさまざまな教会の人と知り合い、それぞれが今まで生きてきた「道」を聞くことで大きな衝撃を受けた。誰一人として同じ道はなく、正しい道というものはないということ強く感じました。

笑ひあり、涙ありのWYD大会でしたが、この大会で、多くの青年たちと出会えたこと、この素晴らしい大会に参加できたことを

そして、日本だけでなく世界各国の青年たちと触れ合う機会もありました。言葉は通じなくてもすぐに仲良くなり、一緒に歌ったり、踊ったりして交流を深めました。ふと、なぜこんなに早く仲良くなれるのかと考えました。それは同じカトリックの信者であり、同じ青年であるということが大きかったと思えます。私たちに、無意識のうちと同じ信仰を持つ者のことを信じる心が備わっているのだと思えます。

# 第35回福島県カトリックの集い

9月19日(月)(敬老の日)に、「第35回福島県カトリックの集い」が松木町教会で開催された。仙台教区管理者 平賀徹夫師を迎えて県内各地から小中高生42名を含め、270名が参加した。テーマは、「主よ、一緒にお泊まりください。」。サブテーマとして「聖体交わりの源泉」。

石巻教会主 任司祭 佐々木博師による講話「エウカリシア・交わりと一致の秘跡 エマオへの旅の追体験」のモヤリ、ミサのなかで交わりと一致を深め、



祭と助祭による共同司式で荘厳に捧げられた「写真」。英語とラテン語の聖歌も歌われるなか、一同は聖体による交わりと一致の実り多

い一日を感謝した。

(実行委員長 鈴木教弘)

## 「子どもの集い」

福島県カトリックの集いの「子どもの集い」は、9月18日(日)午後3時よりマルグリット・ブルジョワセンター(旧ノートルダム修道院)で行われた。

県内の5つの教会より、小・中高生合わせて42人の子どもたちが集まった。

ミサ(イエズス様、高リゲンザ神父様、高橋昌神父様共同司式)「写真下」に始まり、リクリエーション、聖体賛美式、翌日は、朝の散歩をし、自然の中で朝の祈りを唱え、朝食後ワークシヨップ、県カトリックの集いの記念のカードを作るなど、有意義な時を過ごした。リクリエーション、ワークシヨップ以外は、小中高一緒に活動した。



書いていた。新しい友達が出来ました。うれしいです。それに楽しいことがいっぱいでした。

(郡山教会 桜田 華子)

\*優しい気持ちになったよ  
うな気がする。  
イエス様の話を聞くと、ストレスがなくなるような気がして良かった。

(白河教会 ブイ・キム・ロアン)

\*福島教会のよさを感じる。

(野田町教会 池田 隆平)

\*すごく楽しかった。ごはんがいしかったし、いっぱい遊んで楽しかった。夜の聖時間、とてもきれいだった。

(松木町教会 吉田 桃子)

\*お姉さんが来なかつたけれど、もえさんとみほさんがいるのでわたしは、きて楽しかった。うれしかった。(原町教会 庄司 愛花)

中高生のワークシヨップでは、マザーテレサのビデオを見て、一人ひとりの「命の大切さ」を確認しあった。信者としての将来の家族像についても考える良いきっかけになったよつである。子どものミサでは、司会を務めたり、ギター伴奏をしたり、布団運びを頑張ったり、一人ひとりに与えられた役割をしっかりと果たしていた。教会の中での居場所を求めている彼らが、互いに与え合える大切な存在だと再確認することが出来たよつである。普段、部活や学校行事などでなかなかそうできない中高生の多くがこの集いに参加し、共に同じ時を過ごせたことは、とても有意義であつたと思われる。

将来の教会を担う子どもたちが共にすごした2日間、新しい友たちができ、すでに知り合っていたもの同志は、友情を深めることができたよつである。聖時間(高橋昌神父様司式)をし、「聖体のある修道院に泊まり、県大会のテーマ「主よ、一緒にお泊まりください」を文字通り実践した子どもたち、今回の目的は十分に達成できたよつに思う。「子どもの集い」責任者 Sr.安田 禮子)

小学生のワークシヨップでは、「教会に行っている。よその家と育て方が違う。大事にしていることが違う。」など自分の家とよその家の違いに気づいた。聖タルチジオの話をして、「聖体を大切にしたい。教会のことをもっと遠慮しないで話そう、行動や行いでイエス様の愛を勇気をもって示そうと確認しあった。

子どもの感想では、次のように

# 市の中心部に祈りとつどいの場 いわき教会新聖堂落成・献堂式

老朽化に伴う新築を進めていた、カトリックいわき教会（福島県いわき市平字堂根町3-1・主任司祭 フォリシユ・チェスワフ神父）で10月10日、仙台教区管理者 平賀徹夫師の司式で献堂式が行われた。

献堂式には当教会所属信徒をはじめ、仙台教区はじめ県内外から司祭、信徒、シスター、建築工事関係者等、300人を超す人々が参列して喜びを共にした。献堂式の後、参加者全員が新聖

堂をバックにして記念撮影。その後行われた祝賀会は信徒ホールに入りきれず、中庭に特設会場を設け参加者全員で新聖堂の落成を祝った。

新聖堂は、市役所、県合同庁舎、法務局等の官公庁に近く、周りに市民会館、市立図書館、そして教会正面には市立美術館があり、数多くの市民が集まるいわき市の中心に位置している。

構造は、鉄筋コンクリートながら、木をつまみ取り入れ、教会正面に実現します。



聖堂と信徒ホール・司祭館

面の市立美術館との調和をはかり、聖堂内部は音響はもろろんのこと、落ち着いてお祈り、黙想が

## 典礼の霊性を深める

神学顧問 佐々木博

### 交わりと一致の実現

「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの体にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです」（1コリント10・16 17）。典礼の中心であるエウカリスティアは、「まことの食べ物、まことの飲み物」（ヨハネ6・55）である「キリストの御体と御血」を分かち合うことによつ

て共同体の交わりと一致を見なのです。

典に実現します。

典に実現します。

典に実現します。

交わりと分かち合いを實踐することによって一致を体験している共同体こそが、まさに相応しい典礼活動を行うことができるのです。と同時に、典礼活動こそが、あらゆる教会活動の源泉であり、頂点なのであります（『典に憲章』10項参照）。また、典礼が教会の交わりと一致を生み出し、わたしたちを世界に派遣するのです。



できるようステンドグラスをうまく使い、採光、照明が工夫されている。

田中信明ドミニコ会管区長は献堂式のミサの説教の中で「新聖堂はもろろんバリアフリーですが、人間も色々なバリアーを持っています。多くの人たちがそのバリアーを突き破って、様々な機会を通して集える場所にして欲しい」と訴えた。

また、平賀師はお祝いの言葉の中で「2004年4月1日から平湯本、小名浜、勿来の各教会が一つになりカトリックいわき教会として再編されましたが、仙台教区における小教区再編のモデルとして、皆が期待し注目して見えています」と話された。（佐藤賢一）

## 花巻教会献堂

### 50周年記念大会

9月24日（土）、花巻教会献堂50周年記念大会を開催した。

記念ミサは、教区管理者 平賀徹夫神父の主司式のもと、当教会主任ツェゲル神父と、ヨセフ、土井勝吾、横島健二、会津隆司、佐藤修の各神父による共同司式で荘厳に行われた。晴天に恵まれたこともあって、県内外の教会からお祝いに駆けつけた人を含め120余名が参

加。

続いてホテル・グランシエール花巻で記念の集いが行われた。祝賀の宴で、記念誌の披露が行われ、司祭館を描いた鎌田美幸さんの水彩画「写真」が誌面を飾っていることなどが紹介された。また、献堂の日1955年9月26日が誕生日という近藤昌利氏が紹介されるなど、和やかな雰囲気の中に献堂50周年を祝った。

この節目にあたって、花巻教会に関わった、司祭、修道者、近隣教会の信徒の方々、その他多くの方々のご支援に感謝し、今後とも各位のご支援を切にお願いしたい。（小田代将正）



# 講演要旨

## 身近なところから見た一人の教皇様 ヨハネ・パウロ2世とベネディクト16世 講師 ヨゼフ・ピタウ大司教

10月2日(日)午後2時より3時半まで、カトリック北仙台教会聖堂において、仙台ロゴス研究所主催による第5回講演会が行われ、昨年24年ぶりにヴァチカンより帰国された元社会科学アカデミー長官・元教皇庁教育省次官であったヨゼフ・ピタウ大司教から、ヨハネ・パウロ2世の業績と思い出、また、このたびベネディクト16世教皇として選出されたラツインガー元教皇庁教理省長官・首席枢機卿の人柄と新教皇への期待が話された。終始熱のこもった大司教の話に、200名ほどの聴衆は熱心に聞き入った。

### ヨハネ・パウロ2世

#### 最晩年の肉体的苦悩

『あなたは、若いときは、自前で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。』これはヨハネ福音書(21・18)が伝えているペトロへのキリストの最後の言葉であるが、この言葉はヨハネ・パウロ2世の人生と死のアイコンとしてよく理解することができます。

教皇様がまだ若くて健康だったころ、全世界へ100回以上も巡礼の旅にでました。しかし、1990年ころからパーキンソン病が進み、旅は少なくなりました。教皇様ご自身は病気の



て接吻する、苦しんでいる人々を抱く、病人を訪問する、ご自分を狙撃した犯人を赦す。そして声、きれいな声でミサをさげる、若者たちと一緒に歌を歌い、訪問する新しい国の言葉を覚えようと努力されました。たった3日間の滞在に日本語で直接話したために、6ヶ月も準備された方でした。

しかし、その言葉の才能さえも最後には犠牲にしなければなりません。今年のご復活、3月27日正午、最後のコミニケートされようとしたとき、声がぜんぜん出ませんでした。世界に祝福を与えようとして、右手で十字の印をきったとき、声のコミュニケーションはできませんでした。でも、全世界の人とジェスチャーと心で対話できました。すべての力を、体を、声を、言葉を使い果たして、ついに復活の8日目に亡くなられました。

ヨハネ・パウロ2世の中心的なメッセージは、次の三つです。

「怖れるな！キリストに扉を開けて下さい」。これは教皇に選ばれたときの最初の全世界へのメッセージでした。信頼をもってキリストに心の扉を開けるように呼びかけたのです。最高の完全性に達したキリストを受け入れることによって、人間は完成され神聖なものになります。と。

“Duc in Altum” 沖に漕ぎ出して、網を降ろし漁をしなさい(ルカ5・4)。第二のメッセージは2000年の聖年の終了式(2001年1月6日)のときに話されました。新しい千年期に入るとき、恐れ、ためらいを感じないで、広い海に漕ぎ出して、神の力に信頼して、ペトロのように網をおろしましょう。“もう一度キリストから再出発しなさい”でした。そして、再出発するために：

「記憶の浄化」が必要だと言われました。「新千年期のはじめ」の中で、また、2000年3月に聖ペトロ広場の大きな十字架の前で、教皇様は神に向って、教会が、過去2000年の間に犯した罪の赦しを願われました。自由でなければならぬキリスト教を暴力をもって押し付けたことの赦しを、謙遜に全世界の前で折り求めました。過去の歴史をお詫びして下さい、とまず神に、そしてその国の人々に詫びたのです。日本も記憶の浄化を中国、フィリピン、南洋諸島、韓国等々に勇気をもってしなければならぬでしょう。

ヨハネ・パウロ2世が特に意を用いられたこと

(文責者注：次の6点について大司教様は幾多の回勅をもとに語られたが、紙数の都合ではじめの5点については割愛します)

信仰と道徳の擁護。  
キリスト教道徳の擁護。  
エキメニズム。  
他宗教との対話、協力。  
人間を中心にする。  
平和への努力。25年以上にわたって平和のための努力を続けられました。それはナチスと共産主義の暴虐を実際に経験したからです。共産圏が崩壊したのはいろいろ理由はありましたが、教皇様の努力はその一つでしょう。1991年と2003年の米国とイラクの戦争を防ぐためにもベストを尽くしました。成功しませんでした。成功しませんでした。カトリック教会がどれほど平和を大切にしているかを全世界に示しました。

神の人、祈りの人です  
教皇様個人の聖堂で私は何

度か、一緒にミサをささげることができました。ミサに参加することによって、教皇様の働きの中心はどこにあるか理解できたのです。跪いて祈っている姿に、全世界が教皇様の肩にかかっているようにみえました。ロザリオをいつも唱えていました。日本への旅のとき、羽田に着いてから代表者と話をし、食事をともにされてから、どこにおいでになられたかお見えにならないので心配して探しましたら、教皇様は聖堂に入られてロザリオを手に十字架の道行きの祈りを唱えておられました。彼はいつも神の人、祈りの人でした。

ベネディクト16世

対話の人 ラッツィンガー 枢機卿

1980年の終わり頃、私はイエズス会の総長代理補佐に任命されローマの総本部で働くことになりました。イエズス会には多くの大学や神学部があり、各部署の相談・報告のため、ラッツィンガー枢機卿様と毎週一回くらいお会いしていました。最初の印象は「対話の人」でした。相手の意見や説明をよく聞きました。その態度には相手から学びたいという謙

虚さが表れていました。有数の神学者で、そして、文化人です。ピアノをきれいにひきます。

2005年4月8日、聖ペト

口大聖堂でのローマ教皇を選ぶにあつてのミサの中で、ラッツィンガー枢機卿は説教(ホメリア)をなさいました。その翌日の午後、教皇に選ばれたのです。そのホメリアはラッツィンガー枢機卿の中心的な考えを表していると思います。それは、「未熟な子ども信仰にとどまってはならない。信仰における未熟の状態とは何か。聖パウロは答えます。『わたしたちは、もはや未熟な者ではなくなり、人々を誤りに導こうとする悪賢い人間の、風のように変わりやすい教えにもあそばされたり、引き回されたりすることなく、むしろ、愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます』(エフェソ4・14、15)と。



信仰だけが一致を創造し、愛によってそれを現実にします。『わたしはあなた方に最高の道に愛をもつて真理を現すること。愛は真理なしではめくらす。愛なしの真理は騒がしいどらのようなものです。』(コリント13・1参照)

に教会は引き回されたのです。聖パウロが言われた通りになるのです。

熟した信仰は深くキリスト

に根をおろさなければ本当のヨーロッパを立て直すことはできない、と言っているのだと思えます。また祈りの生活、典礼と聖歌の美しさも大切に、強調しなければならぬという聖ベネディクトのメッセージを送りたかつたのだと思います。

皇様はその道を歩もうとされているのです。種々のメディアは新教皇様を「厳しい」、「保守的」と言ったりしますが、実際はそうではありません。いつでも「対話」を重視し、どんなに長い時間かかっても「対話」に開かれた方です。事実、「真理、道徳」は「保守的」、「進歩的」ということで変わるものではありません。「真理」は好き嫌いを超えるものです。教皇様はきつと一人ひとりを大切にされ、人間の自由と尊厳が護られるよう働かれるでしょう。知識も体験も豊富な文化人です。教会をよい方向へ導いて行かれるでしょう。すばらしい教皇様のためにお祈りしましょう。

ベネディクト16世という名前

新教皇様の名前ベネディクトは西洋の修道生活の創立者であり、また、西ヨーロッパの最初の保護聖人でもあります。

教皇としての基本方針

新教皇様は、全世界に散らばっている司教様と一致協力して、全世界のカトリック教会に奉仕したいのです。教皇は上から立つて命令を与えながら指導するよりも、相談、協力しながら指導し、導くということですからローマからの答えと解決を待つのではなく、教皇と司教様方が一致協力して、解決を探り出し、決定するというやり方です。これは第二ヴァチカン公会議が決めたやりかたで、教

(文責 佐藤英樹)



熱心に語るピタウ大司教

この描写は現代の状況を表わしています。この10年の間に多くの神学上の説が現れました。多くのファッション、流行

「神の先に何も置くな」、最高の価値は神であるということをおそらくヨーロッパ共同体を創ろうとする政治家たちに、間接的に、キリスト教的な伝統

# カトリック精神で地域医療に貢献 光ヶ丘スベルマン病院創立50周年

10月5日(水)、光ヶ丘スベルマン病院理事長・鷹鷲達衛神父、院長・志村早苗の創立50周年記念式典と祝賀会がホテル仙台プラザを会場に開催された。

式典には、病院関係者、教会関係者など約100名が参加した。同病院理事長鷹鷲達衛師は、「50年の間には、さまざまな困難があつたが、職員の努力と、多くの方々の支援に支えられ、現在に至っている。現在、病院運営もよい方向に向かつており、皆様に感謝したい。弱い立場の人の為に尽くすという教会の使命を果たすことがこの病院の精神である。今後ともよ

ろしくご支援ください」と挨拶した。来賓として招かれた、教皇庁臨時代理大使レオン・カレンガ参事官は、教皇様からの祝詞を伝えるようにと言われましたと前置きして、「東北唯一の力トリック病院が素晴らしい働きをしていることに感謝します」と祝辞を述べた。

式典の中で、50周年のスローガン入賞者の表彰が行われ、最優秀賞に輝いた中村絹代さん他3名が受賞した。中村さんの作品は『あなたの笑顔と喜びのため、私は全力を尽くしたい』というもの。

光ヶ丘スベルマン病院は、終戦後、カトリック北仙台教会の主任司祭ピエール・ピソネット神父(ドミニコ会)が結核に悩む貧しい人たちのために無料で治療する病院を建てようと当時仙台に駐留していた米軍およびその家族から、寄付を集め、来日中のスベルマン枢機卿



挨拶する鷹鷲理事長



から援助を受け資金を準備した。さらに東北大学医学部の全面的な協力を得て、1955年9月26日、カトリック仙台教区が80床の結核病院として開設した。その後結核病棟はなくなつたが、施設設備、病院スタッフの充実を図り現在では地域医療の中核となる140床の一般病院として発展した。1998年、宮城県で初めてのホスピスを開設。2004年には仙台で初めて特殊疾患病棟を設置した。現在の診療科目は、内科、小児科、産婦人科、ホスピスとなっている。

## ホームページ 『ごたいせつネット』 を開設しました。



このホームページでは、特に「つながりを必要としている人々」を大切にしている方々とその活動を紹介していきたいと考えています。また、「ごたいせつ」という言葉は、「愛」という言葉よりも心にしっくりくるように思います。それで『ごたいせつネット』なのです。アドレスは <http://gotaisetsu.net> です。

今、何かにつながりたいけれど、どうしたらよいかかわからないという方々のための窓口になるようなホームページになればいいと考えています。スタートしたばかりなのでまだまだ情報は少ないですが、これから少しずつ増やしていきたいと考えています。

このホームページはカリタスジャパン仙台教区担当者田中丈夫神父の責任のもとに作成されています。(田中丈夫)

《主な内容》  
カリタスについて、今月のカリタスさん活動グループ路上生活者支援活動・仙台タルク・AA(リンク)・医療福祉施設・スベルマン病院・暁星園・あけの星荘・パルシア・カリタスの丘・仙台天使園・小百合園・ラ・サール・ホーム・さゆり保育園・ナザレト愛児園和・なごみぎやらり

には「カリタス Greater Sendai」という名前もついていますが、Greater Sendaiとは「仙台圏」という意味ですので、仙台圏における『カリタス』という意味になります。『カリタス』とはギリシア語アガペーのラテン語訳で、日本語では『愛』と訳されます。「岩波キリスト

### 5年後を見据え・教区の活性化

#### 「第3回宣教司牧を考える会・代議員会」開催

9月23日(金)仙台司教区センターで代議員14名が参加して開催された。

冒頭、教区管理者 平賀徹夫師は、「仙台教区には司教がい

ない。早く決まって欲しいが、司教がいらないからといって信仰が沈んでしまうことがあってはならない。年2回、4県から集まって、報告し合い、分かち合いながら仙台教区の一

と、神の民である喜びを伝えていくものとして助け合い、力づけ合いながら元気を出して

けるようにしましょう」と挨拶した。

続いて、第1議題、今年度の「教区活性化研修会」について各県での話し合いが報告され、

#### 教区人権を考える委員会

委員長 園部英俊

委員会では7月5日、さいたま教区の国際交流センター「オープンハウス」を視察したのでその概要をお伝えする。

この施設は94年に当時の岡田司教谷事務局長が「外国籍信徒との出会いの場」、「交流の場」の必要性を説いたのを受け、「移住者の相談と人権救済」を主な仕事として小山市に設置されたのが始まりである。97年に浦和の教区事務所と同じ建物に移転した。

スタッフは、所長のウェイン神父、矢吹助祭、シスター小塚、フィリピンから吹助祭、シスター小塚、フィリピンからの信徒宣教者ステイ・コドワさんはじめ

意見交換が行われた結果、

「第4回教区活性化研修会」を、聖体の年にちなんで「教会にいのちを与える聖体」をテーマに各県ごとに開催することを決定した。

昼食をはさんで、午後から第2議案「5年後を見据えた宣教司牧のあり方を考える」について報告と討議が行われた。

司祭も信徒も高齢化がすすんでいく中で、小教区のある方が問われている。信徒が教会の中で果たす役割についても小教区によっての意識の違いも大きい。十分な理解が得られるよう、意識改革や研修が必要である、などの意見が出され、具体的なものについては代表者会で、検討する事となった。

司祭 修道女 信徒ボランティアである。96年以来同教区では他国籍の人も「日本人」も同じ神の民であり、同じ寄留の民である。教区は日本人も含めて様々な国籍 文化をもった人々の集まりで、日本人・外国人という区別はないとの考えから「多国籍教会」という表現が使われるようになった。そしてこの頃からオープンハウスは、言語別司牧」に重点を移したとのこと。

現在は、問題を抱えた外国籍信徒のカウンセリングや問題解決のための「コト」ネットワーク、「多国籍教会」の理念に基づく司牧(司祭や修道者の言語獲得

続いて、「仙台教区人権を考える委員会」から「外国籍信徒と共にある教会づくり」と「平和と旬間における教区の取り組みのサポート」をテーマに活動を続けていることについて報告が行われた。

また、木村国基師よりWYD参加の報告がなされた。

広報委員会からは、災害時の被害状況が教区本部に速やかに伝えられるようなシステムの必要性と、復活祭・降誕祭・元日のミサ時間を各小教区から教区本部に報告して欲しいなどの要望が出された。

教区会計からは、社会情勢や高齢化にともない、収入が減少しているが、支出を抑えることも困難である。財政顧問の方々に知恵をお借りして、財政の健全化に努めていきたいとの報告

養成 母国語によるゆるしの秘跡や黙想会、ミサ次第、幼習洗式、通夜式次第の翻訳、信仰教育、そしてスタッフ研修などに取組んでいる。

視察をとおして、今後の仙台教区の取組みに次のようなことが必要を感じた。

「問題を持つ人の支援のための施設づくり」以前に、仙台教区として「多国籍教会」を教区の基本方針として明確に示す。

司祭の認識を高める。言語別のサポートとして、海外宣教の経験をもつ修道者に活動に参加してもらう。教会内外の人材、社会的資源の把握ネットワーク化。私達を温かく迎えて下さったオープンハウスの皆様から感謝いたします。

報告があった。最後に、各県から、県大会や行事等の報告が行われ、閉会となった。

#### 高松教区 溝部司教来仙

溝部司教は、新潟教区大会での講演を終えた翌日仙台を訪れ、元寺小路教会で9月25日9時30分のミサの司式をされた。

同教会での溝部司教司式のミサは、昨年6月以来のこと。

溝部司教は、主日の説教の中で、「今日の福音書(マタイ21:28・32)のキーワードは、『考え直して』だと思えます。兄の方は行きませんと言ったが考え直して行った。弟は行きませんと言ったけど考え直しませんでした。考え直さずか考えないか、ここが分かれ目になっています。私たちは頭でいるんな計画を立てます。ところが、反対にあったりうまくいかなかったり、挫折したりします。それは当然です。この時にあきらめてしまつたか、または頭を垂れて考え直してもう一度やってみようと思えるか、ここが分かれ目です。」と話された。

ミサの終わりに、8月のワールドユースデー・ケルン大会に宮城県から参加し

た5人の若者の紹介が司教からあり、WYDの感動の体験が一人ひとりから語られた。

また、発行されたばかりの説教集第2集『聖霊の息吹を受けて』(高松教区広報委員会編、サンパウロ刊、定価1000円)の販売があり、再会を喜ぶ信徒の、サインの列が長く続いた。写真。(今田 遼)

1582年2月長崎を出立した4人の少年がいた。その中の一人が大村領中浦出身のジュリアンであった。ユリアンであった。有馬のセミナーオ在学中、選ばれて日本の諸侯の使節としてヨーロッパの旅にでた。9年の歳月を経て帰国、

秀吉から家臣になることを勧められたが、それを断り、イエズス会に入会。マカオで神学を終え、1608年長崎で司祭叙階。以後有馬領を中心に司牧活動に従事した。1614年禁教令発布に伴い、日本に潜伏、主に島原半島を中心として働き、信者の世話を行った。更に司祭不在の筑前、豊前を巡った。1632年小倉において逮捕され、長崎に送られ、1633年10月20日西坂の丘にて逆さ吊るしの刑で殉教。

**<シリーズ>**  
**188名日本殉教者列福の推進**  
**中浦ジュリアン - 長崎の殉教者**



ミサの終わりに、8月のワールドユースデー・ケルン大会に宮城県から参加し

# 投稿

## 「土着化」と「教会一致」へのよきヒント

カトリック大船渡教会信徒会長 熊谷 雅也  
『ケセン語訳聖書』の出版社イー・ピックス代表)

大船渡教会の山浦玄嗣さん「写真左」がケセン語訳聖書の第一巻目『マタイによる福音書』を出版してから間もなく丸3年になろうとしています。

続いてマルコ・ルカ・ヨハネと半年おきに全四巻「写真下」を出版し、これまでにシリーズで約一万冊以上の『ケセン語訳聖書』が全国の読者に読まれています。読者は北海道から沖縄まで日本全国にわたっています。

昨年の4月には、教皇ヨハネ・パウロ2世に謁見し、直接この仕事の意義を報告する栄誉を得ることができました。

この本が多くの読者を得た理由には大きく2つの背景があつたように思います。一つは、これまでの聖書翻訳に疑問や不満を持っていた多くのクリスチャンの心をとらえたこと。もう一つは、世界的にグローバル化が進み「ことばの多様性や力」が失われつつある時代背景の中で、地方のことばをもちいて、これほどまでに完成度の高



い仕事を成し遂げたことへの驚歎と讃辞、そして共感です。後者については、直木賞作家の池澤夏樹氏が毎日新聞の書評で、また柳田邦夫氏が近著『壊れる日本人』の中でかなり

のページを割いてこの仕事を評価しています。私は、ケセン語訳聖書の出版社代表の立場ですので、数多く開催された山浦さんの講演のほとんどをこの目で見てその聴衆（ほとんどの場合がクリスチャン）の反応を見てきました。地元の大船渡はもちろん、函館・仙台・鶴岡・土浦・東京・沖縄などの教会や教会の関連施設で行われた20回以上の講演を聴きましたが、いずれも聴衆から大きな共感を持って受け入れられていました。これまでいくらか聖書を読んでもさっぱり理解できなかった教えが、ケセン語訳聖書によって一気に腹に落ち、長年の心のしこりが一気にもみほぐされたという「喜びを伴う共感」であつたと思います。感動を得た読者はその感動を友に伝えたい衝動に駆られ、共感の輪が広がってゆきました。考えてみると初代教会ではこのようにしてイエ

又さまの言葉は喜びの気持ちとともに自然に広がっていったのでしよう。ケセン語訳に対する共感の強さは、カトリック信者に比べて聖書をよく読むといわれるプロテスタントの牧師さんや信者さんたちに特に顕著なようです。実際このケセン語訳聖書は、多くのプロテスタントの方々に読まれており、プロテスタント教会の講演に招かれる機会が数多くありました。彼らの多くは、カトリックの中からこのような仕事が出たことに驚きと喜びを隠さず、期せずしてカトリックとプロテスタントの「共感の場」がケセン語訳聖書を通して生まれていきます。



昨年8月、山浦さんは沖縄のキリスト教協議会の招きで沖縄に行きましたが、山浦さんの招聘に強く動いてくださったのは沖縄の聖公会の谷主教様でした。なんと谷主教様は、ケセン語の「主の祈り」を毎日唱えており、ケセン語訳聖書を使って勉強会をしているそうです。那覇での講演は宗派を越え、多くの聴衆が集まり、和気あいあいとしたものでした。

書」の仕事は、私たちの教会がいま抱えている、「土着化」「教会一致」へのヒントをたくさん持っていると感じています。そして何よりも年ごとに高齢化し、信者が減ってきているわたしたちの教会にパワーを注ぎ、流れを大きく変える力があると私は感じています。

## 青年交流会

仙台 高松 一本杉教会・山本撰

先日、10月1日から4日まで高松教区で行われた青年の交流会に仙台教区の4人の青年たちと共に参加しました。



ある中島町教会で。長旅で疲れていた我々を四国の青年たちが温かく迎えてくれました。まず一通りの簡単な自己紹介の後、早速焼き肉パーティーが始まりました。そこで四国の方々の温かさ、そしてオープンな人間性に触れ、一緒に焼肉を食べるうちに、まるでその場の全員が知己であつたかのような不思議な一体感が私たちを包み込みました。こうなると同世代の若者同士、一度打ち解ければもう四国も仙台も関係ありません。分かち合いを行った後も話題は尽きることなく、高知

での最初の夜は更けてゆきました。その翌日は、全員で中島町教会での司教様のミサにあずかりました。ミサ後、高知の観光名所桂浜に行き、坂本竜馬像が見守る中、バナナを旗に見立てたビーチフラッグならぬビーチバナナ、司教様を行司にした砂浜相撲などで四国と仙台の熱い火花を散らしました。そんな集いを過ごす中で感じたのは、司教様は、四国でもこんなに多くの若者の心を掴んでいらつしやるということ、そして司教様の熱意に応える心意気を持った青年たちが四国にこんなにいたということでした。司教様が高松教区に着座されてから始まった四国と仙台の交流。普通に暮らしていれば交わることとはなかつたであろう青年たちが、司教様と共に同じ食卓を囲み、同じ歌を歌い、共にミサにあずかる。物理的には大きな距離の隔たりはあつても、そのハードルを超えて熱い交流をすることができると感じました。カトリック教会という繋がりには、そして我々青年にはそういった可能性がまだまだ隠されているのだというところ、そしてそれをもっと積極的に生かす道があるのだというところを深く考えさせられた四国の旅でした。

# 各地から

青森 鮫町教会

ロザリオの聖母修道院巡礼  
6月19日(日)塩町、鮫町教会の合同行事、ロザリオの聖母修道院巡礼が行われました。

バス一台に首藤神父様はじめ、折りしもローマから帰られたばかりの和野神父様も一緒くたさり、40数名の参加でした。バスの中でロザリオを唱え、心の準備も整い修道院に到着しました。観想修道会なので、少し近付きにくいシスターたちと思っていました。ごミサの後売店などで会うシスター達は、皆優しい方ばかりでした。「私たちはお祈りで結ばれてい

ますから」とほほえまれると、「そうですね」と素直に返事を返すことができました。

お昼は地元信者さんのご好意で、ほぼフルコースに近い韓国料理をご馳走になりました。日本とは一味違う「のり巻」、初めて食べた「ちぢみ」など。

「ちぢみ」は実際にガス台を庭に出して焼いてくださいました。青空のもと、修道院のお庭でいただくお料理に、心もお腹も満たされ、お料理を作ってくださった方、おもてなしのためお手伝いしてくださったシスター達に感謝しながら修道院を後にしました。途中、繫(つなぎ)温泉で汗を流し無事八戸に帰ってきま

した。修道院からいただいたパンフレットに「ご聖体はみ心の最高のプレゼントです。すべての力はそこから来ます。」と書かれています。今年は「ご聖体の年」。私の心に深く留め、味わっていききたいと思います。

岩手 久慈教会 (畠山 洋子)

8月20日(土)夜と、21日(日)ミサ後に首藤神父様(塩町教会)による黙想会をしました。「5年後の仙台教区を考える」と題して、「小教区に司祭が不在になったら皆さんはどうしますか」との問いで始まりました。何もしないと教会は、昔あったところといった



話になつて、後がいないことでした。ですから今年もまた押し付け役員になりまるところが、すでに佐々木博神父と旧役員が協議して、新たに教会会則案を作成し、20歳〜70歳までの信者を被選候補とする選挙制を導入することになり、去る3月13日の臨時総会で、この新会則案が承認されました。従って定例総会では、投票による選挙の結果、委員会代表、副代表、会計、事務、典礼、広報の各委員が選任されました。様ざまの家庭の事情や、立場に違いの中で、混乱が生じなければと誰もが危惧しておりま

です。次に、司祭不在の集会について話されましたが、私たちカトリックのアイデンティティとして、ごミサのほか何が残るのか、今までの実感からは何もつかめません。「みことば」を伝え、神のご意志に従えるのだからか？信仰共同体の育成が、強く問われる黙想会でした。(高橋 和郎)

## 神様に唾をつけられる

コングレガシオン・ド・ノートルダム  
今泉ヒナ子

「何ですって？ 私なんか？まさか：ああ、イエス様がどうしましょう！」

これが、五十数年前に、自分が修道者になるのかも知れないと気付いたときの、私の最初の祈りでした。驚き。戸惑い。興奮。そして、その底にあった深い平和。

世界中の修道者一人ひとりにインタビューをして「ご覧ください。数え切れない修道者

## 招きにごたえて



たちの顔の色、性格、育ち、入会後の仕事など、全部が限りなく違う中で、一つだけ共通の要素があるはず。それは、入会を決める前に、ある種の神体験があった、ということ

人の仕事はどれも立派ですが、修道生活だけは、偉いとか偉くないとかいう範疇ではなく、神様の存在を否定してしまつたら考えられない生き方なの

です。つまり、修道生活とは、自分のキャリアとして選ぶものなのではなくて、神様の方から先に「唾をつけられる」ことで始まるのです。

十八歳ごろの私にとって、最初は見えない糸で引つ張られるような感じでした。視覚や聴覚に現実に訴えたわけではな

宮城 石巻教会

2005年度、カトリック石巻教会定例総会を5月29日(日)に開催しました。新年度の活動を始めて約半年余り経過しましたが、昨年度までの最大の悩みは、だれも自らすすんで教会



つ改め整理しながら、教会の真の姿を求めていきたいと、信者一同願っております。(倉本純一)

# 活動紹介

## 「宗教教師勉強会」

将来、教職をめざす信徒の大学生と受洗後まもない教師を対象として、月に2回の勉強会を行っています。2年前の秋に溝部司教の呼びかけで始まったこの会では、「カトリック教会の教え」(中央協議会)を読みながら分かち合いを進めています。現在約20名のメンバーがいますが大半は仙台にある大学のカトリック学生で、すでに数名がカトリック学校や幼稚園へ教師として巣立っています。もちろん宗教の教師になるためには大学で宗教学などを学



## 私の気分転換

里村 智彦(八戸塩町教会)

ハリケーンの暴風雨のように押し寄せる仕事の波、何とか持ちこたえている気力と体力。特に気分転換などしている訳ではないのだが。ただ、ほっとするのは、準備不足で臨んだ授業なのに今日の授業は楽しかったと言ってくれる生徒の笑顔や、たまに部活に顔を出せば、「ラケット持ってきた、先生練習だよ」と言ってくる部員の笑顔。たま

び、単位をとって宗教科の免許を取得することが必要なのですが、子どもたちを教える立場にしにしか相手できないが、不満を言うこともない我が子の笑顔を見たとき。

職業柄か、人と接することが多い分、色々な人との会話が私の気分転換になっていくのかもしれない。日曜日のミサも気分転換。これといったことを意識的にしていないからこそ自然に気分転換になっているのかもしれない。しかし、一番ほっとするのはコップ一杯のビールかな？



## 修道院紹介

ある信徒は、カトリックの教えを深く学び、それを子どもたちにも伝える言葉をもつてくれるように招かれていると思われま

す。この会では、すでに学校で宗教の授業をもっている教師(仙台白百合学園中・高のSr.吉田と土倉)がまとめ役となって日々の体験を材料に、互いに教えを味わい、確かめ合っています。学校で出会う子どもたちは求道者ではありません。どんなによい教えであっても、日常生活と結びつく感覚がなければ、単なる規則や現実離れた理想で終わってしまいます。身近に感じられる生きた言葉を見つけることがこの会のテーマと言えるかもしれません。

(カトリック北仙台教会信徒館を会場に隔週木曜日夜開催)  
(土倉 相おさむ)

## 殉教者聖ゲオルギオの

### フランシスコ修道会

### 旭町マリア院

北ドイツの小さな村に1869年に創立された修道会で、日本には1920年3人の修道女が来日し、札幌に本部修道院をおき、女子教育を開始し、

戦後の荒廃期に青森において社会福祉事業を開始しました。ここ一関には1956年ベトレム外国宣教会の招きにより、3名の修道女が派遣され宣教会の神父様が用意してくださった一軒の日本家屋を修道院として小さな種がまかれま



使徒的活動として教会の幼稚園の手伝い、要理教室、近隣の婦人たちに料理講習をする日々の中で、交流が深まり、修道院はいつの間にか「マリア院さん」と親しく呼ばれるようになり、現在にいたっています。

1958年、地域の要望とたくさんの方々の援助・尽力・協力によって保育園が設立されました。小さな芽を枯らすことなく生き生きと葉を広げて、現在も地域に貢献し、地域のニーズに応える保育園として、姉妹4人・職員共々神のご加護のもと、一人ひとりを大切に、小さな芽を育て活動しております。

(Sr.黄金崎 征子)

## 新刊案内

「カリタスジャパンと世界 武力なき国際ネットワーク構築のために」

著者 菊地功/発行所 サンパウロ/定価10000円+税

私たちは、四旬節になると、毎年「四旬節献金」をささげています。これはカリタスジャパンを通して、日本と世界中の援助を必要としているところへ届けられています。

ほとんどの人は、この簡単な事実は知っていても、カリタスジャパンの具体的な活動についてはわからないことだらけなのではないでしょうか。本書は、カリタスジャパンの働きを単に紹介しているだけでなく、NGOとは何なのか、真の開発とは何なのか、第三世界が抱えている問題は何か、援助はどのようなべきなのかなど、世界的な援助組織である国際カリタスのもとにあって実際の活動をしているカリタスジャパンの働きを通して、知ることができます。

著者は、新潟教区の菊地功司 同司教は、1995年からずっと、カリタスのルワンダの難民キャンプの働きにかかわっている。その現地ルポも見逃すことができない貴重なもの。本書が、カリタスジャパンと読者をつなぐ絆となることだろう。ぜひ読んでもらいたい1冊です。

